

令和 5 年 5 月 13 日現在

機関番号：12605

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04199

研究課題名（和文）受刑者の社会復帰教育における動物介在介入の効果

研究課題名（英文）Effects of animal assisted intervention in education for prisoners' rehabilitation

研究代表者

甲田 菜穂子（KODA, Naoko）

東京農工大学・（連合）農学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：90368415

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：身体的機能、精神的機能、社会的機能などの理由から、社会復帰に向けた集団処遇、集団教育プログラムに乗りにくい受刑者に対して動物介在介入を行い、対象者への気分やコミュニケーションの改善効果が明らかになった。新型コロナウイルスの感染拡大により、世界的に動物介在介入の実践が止まってしまった期間は、動物介在介入のプログラム開発・改良やレビュー、実践の基盤となる人と動物の関係や対人援助行動・事業に関する様々な調査研究を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で実践している伴侶動物を介在させることによって対象者に寄り添う動物介在介入の支援方法は、可塑性が大きいことが確かめられ、受刑者の福祉向上やその後の円滑な社会復帰、ひいては人々が信頼と協力の元に共生できる社会の構築が期待できる。つまり、司法福祉の充実のみならず、一般人の生活を含む多方面への波及効果が期待できる。日本社会に適合した政策立案には、日本からの学術的報告が不可欠である。

研究成果の概要（英文）：This study conducted animal assisted interventions toward prison inmates who had difficulty in the group treatments and group education programs due to their physical, mental, and social functioning, and revealed the effects of improved mood and communication on the inmates. During the period when the practices of animal assisted intervention were halted worldwide due to the pandemic of COVID-19, this study developed and improved animal assisted intervention programs, conducted review studies and various surveys on human-animal relationships and interpersonal helping behaviors and projects as the basis for the animal assisted intervention practices.

研究分野：社会科学

キーワード：社会福祉関係 ストレス コミュニケーション 動物介在介入

1. 研究開始当初の背景

現在の日本の高い再犯率は、犯罪者の更生支援に課題を残すだけでなく、安全・安心な社会を揺るがす。現在、全国の刑務所において、受刑者に対して様々な社会復帰教育が開発され実施されているが、身体的機能、精神的機能、社会的機能などの理由から集団処遇、集団教育プログラムに乗りにくく、特別な支援が必要な受刑者もいる。本研究は、このような事態の改善に寄与できる可能性がある。

動物介在介入は、人の心身の健康増進、治療、教育などのために、動物を用いて効果をあげようとする実践である。人と動物の親和的な触れ合いが、補完代替療法や生活の質の向上といった領域で注目され、効果検証もなされてきた。動物との触れ合いには、人の血圧の降下や医療機関への受診回数の減少といった身体的効果、抑うつや自尊心の高揚などの心理的効果、他者との会話の増加や人間関係の改善などの社会的効果が証明されている。

刑務所における動物を用いた社会復帰教育プログラムは、他の動物介在介入の効果の様相と根本は異ならない。受刑者更生という困難な取り組みの中では、動物を介在させて少しでも効果をあげようとする試みは魅力がある。しかし刑務所での実践には、様々な制約があり、また特殊な配慮が求められ、科学的実施条件を満たすことは容易ではない環境にある。そのため、実践が比較的ある欧米であっても、科学的な取り組みはまだ少ない。刑務所で最も導入されているイヌ介在介入でも、システマティックレビューの基準を満たす効果検証論文は、2020年において世界でも20編しか認定されていない。本研究が位置づくプロジェクトからの研究成果として、受刑者への身体的、心理的、社会的効果を実証した2編の論文は、この20編の中に数えられ、欧米が先導する当該分野でも注目されている(Villafaina-Dominguez et al., 2020)。このプロジェクトは、知的障害や精神疾患を持つ受刑者のストレスマネジメントやコミュニケーション能力を向上させるための動物介在介入プログラムを開発・発展させ、その効果検証を行うものである。動物の導入は、様々な対応が可能であり、構造化や標準化された教育プログラムを実施する前段階の基礎講座として適している。さらに、受刑者の犯罪傾向や生活背景、心理・発達・能力などの特性には個人差があり、各自が抱える困り事や課題も様々複雑である。動物介在介入の適応範囲をより広げるためには、介在動物の種や人と動物の関係を踏まえた介入方法を吟味し、プログラムを開発・改良していく必要がある。

2. 研究の目的

本研究期間は、新型コロナウイルスの感染流行期にあたり、世界的に動物介在介入の実践が止まってしまった。当初は、刑務所における社会復帰のための更生教育での動物との触れ合いが、受刑者のストレスマネジメントやコミュニケーション能力の向上に与える効果を検証するため、新規プログラム、改良プログラムという2種の実践研究を行った。さらには、動物介在介入の実践の理論的、技術的基盤となる人と動物の関係の解明に研究目的を広げ、社会状況に応じて資料調査や論文調査を行った。

3. 研究の方法

受刑者のストレスマネジメントやコミュニケーション能力を向上させるために、受刑者の特性に応じて動物を介在させた2種の更生教育プログラムを2カ所の刑務所において実施し、質問紙を用いた効果検証を行った。市民による実践では、実践側に過度な負担をかけないようにモニタリングも行った。

コロナ禍においては、動物介在介入に関する論文のレビュー、動物絵本の中の人と動物の関係の描写の定量化、人々の援助行動・事業についてのウェブ調査などを行い、論文執筆や投稿活動に力を入れた。

4. 研究成果

研究期間初期における刑務所での改良版イヌ介在介入プログラムの実施では、動物との触れ合いによって対象者の気分や対人、対動物とのコミュニケーションの改善が認められ、基本的効果に関して従来版と遜色ない結果となった。その後の新型コロナウイルスの感染流行のため、この改良版プログラムは実施できなくなった。そのため、コロナ対策を施したプログラムを計画し直した。しかし、期間内に感染流行は収まらず、このプログラムは結果的にはうまく機能しなかった。別の刑務所では、少人数制で個別課題に対応するヤギ介在介入プログラムを実施していた。事例研究として、対象者の生活面で顕著な効果が得られたが、施設でのヤギ飼育が困難になり、プログラムは中止となった。その後、小型草食動物を介在用に育成し、ヤギプログラムの骨子を踏襲した新規プログラムを構築し、実施した。このプログラムは、対象者の悪い気分を好転させる効果が確かめられた。またプログラムの効果には個人差があり、今後、実践を積み重ねることで精査が可能になると考えられる。

研究期間の後半では、コロナ禍でも可能な研究として、様々な動物種による介在介入の効果や導入についての総説論文を執筆し公刊した。従来よく用いられてきたイヌやウマ以外の動物介

在介入の有効性を確かめ、実践の多様化や発展の可能性を論じた。また動物介在介入の教材開発やプログラムの開発、改良の基礎的知見となりうる動物絵本の描写の定量的分析を行い、動物観や人と動物の関係について論文を公刊した。絵本には多くの動物が登場するが、社会に流布している動物種のイメージや人との関わりの歴史に沿った描かれ方をしており、動物に対する態度が発達初期から絵本を通して読者に形成されていくことが推察されること、その中には現実とは異なる動物の生態や行動が描かれることもあり、人と動物の関係を悪化させる懸念も見出した。また、人の主人公が絵本の中で様々な経験を積むにあたり、描かれた動物が現実の介在介入で見られるような役割を果たしていることを確認した。さらに、一般人による他者への援助行動とそれを誘発する効果的な啓発方法についての研究を進めた。そして、ウマとヤギの個体特性に注目した対人行動を含む社会的認知能力に関する実験を行い、人と動物のコミュニケーションを円滑にするための示唆を得た。その他、人々の動物観や動物利用に関する倫理観、動物に関する対人コミュニケーション、人と動物の相互交渉、小型草食動物による介在介入プログラムの開発などの研究を進めた。これらは、動物介在介入の実践の成否に影響する潜在的要因になり得ると考えられる。結果として、厳しい社会情勢下でも遜色ない研究成果をあげることができた。

伴侶動物を介在させることによって、対象者に寄り添う本研究の支援方法は、受刑者の福祉向上やその後の円滑な社会復帰、ひいては人々が信頼と協力の元に共生できる社会の構築が期待できる。つまり、司法福祉の充実のみならず、一般人の生活を含む多方面への波及効果が期待できる。日本社会に適合した政策立案には、日本からの学術的報告が不可欠である。本研究で得られた研究成果を活かし、実施者にも大きな負担を伴わない動物介在介入プログラムを開発・確立し、海外にも発信していきたい。

一方で本研究ならびに当該分野は、新型コロナウイルスの感染流行による実践中止という予期せぬ事態に見舞われ、大きな打撃を受けた。社会が混乱する状況では、支援を必要とする社会的弱者が大きな不安を抱くにもかかわらず、接触を控えるために支援の提供ができないという大変心苦しい期間が続いた。命あるもの同士が膝を交えて対面し身体接触し、ぬくもりを分かち合い助けあう動物介在介入の本来の強みや独自性が、状況が変われば弱点になることも明白になった。この打開策について、現状では決定打となるものを見い出せておらず、今後の課題である。

< 引用文献 >

Villafaina-Dominguez B., Collado-Mateo D., Merellano-Navarro E., Villafaina S. 2020. Effects of dog-based animal-assisted interventions in prison population: A systematic review. *Animals*, 10: 2129.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 13件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Nakagawa J. & Koda N.	4. 巻 6
2. 論文標題 Emotional depictions of dogs and cats in interactions with humans in picture books	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 People and Animals	6. 最初と最後の頁 Article 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hara K. & Koda N.	4. 巻 11
2. 論文標題 Characteristics of animals in picture books of the fantastic there and back again stories	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 International Journal of Literature and Arts	6. 最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11648/j.ijla.20231101.12	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 甲田菜穂子・加瀬唯香	4. 巻 65
2. 論文標題 動物介在介入の有効性：イヌ、ヤギ、ウサギ、モルモットの比較から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 378-389
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hara K. & Koda N.	4. 巻 9
2. 論文標題 Conversion in depictions of anthropomorphic animals in picture books	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Literature and Arts	6. 最初と最後の頁 374-383
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11648/j.ijla.20210906.27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shimatani H. & Koda N.	4. 巻 9
2. 論文標題 Dogs and cats and their relationships with humans as depicted in picture books	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Literature and Arts	6. 最初と最後の頁 63-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11648/j.ijla.20210902.13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野村良梨子・甲田菜穂子	4. 巻 57
2. 論文標題 獣医療コミュニケーションの円滑化のため作成したリーフレットの効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌	6. 最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Su B., Koda N. & Martens P.	4. 巻 28
2. 論文標題 How ethical ideologies relate to public attitudes toward nonhuman animals: The Japanese case	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Society & Animals	6. 最初と最後の頁 695-712
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/15685306-12341585	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Hara K. & Koda N.	4. 巻 8
2. 論文標題 Quantitative analysis of anthropomorphic animals in picture books: Roles and features of animals	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Literature and Arts	6. 最初と最後の頁 308-315
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11648/j.ijla.20200806.11	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshida N. & Koda N.	4. 巻 11
2. 論文標題 Goats' performance in unsolvable tasks is predicted by their reactivity toward humans, but not social rank	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2020.00150	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Song Y., Hirose T. & Koda N.	4. 巻 2
2. 論文標題 Psychosocial impact of pet keeping on schoolchildren in China	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 People and Animals	6. 最初と最後の頁 Article 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野々口正脩・甲田菜穂子	4. 巻 51
2. 論文標題 映像媒体から見た日本人の動物観：ハチ公を題材とした日米映画の比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌	6. 最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田直矢・甲田菜穂子	4. 巻 51
2. 論文標題 問題解決場面におけるボニーから人への関わりかけに関する実験	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌	6. 最初と最後の頁 92-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Su B. Koda N. & Martens P.	4. 巻 13
2. 論文標題 How Japanese companion dog and cat owners' degree of attachment relates to the attribution of emotions to their animals	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0190781
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0190781	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計13件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 加瀬唯香・甲田菜穂子
2. 発表標題 小型草食動物を用いた動物介在介入の有効性
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川珠里・甲田菜穂子
2. 発表標題 絵本におけるイヌとネコの感情描写
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水田さくら・甲田菜穂子
2. 発表標題 盲導犬事業に対する援助行動と効果的な啓発方法
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 甲田菜穂子・原花苗
2. 発表標題 動物絵本における擬人化描写：動物の種類ごとの特徴
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 原花苗・甲田菜穂子
2. 発表標題 物語絵本における擬人化動物の描写タイプの転換
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小山恭美, Su B., 甲田菜穂子 & Martens P.
2. 発表標題 動物の種類・利用方法に対する態度に影響を与える要因
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鳥谷日菜子・甲田菜穂子
2. 発表標題 絵本に描かれるイヌ・ネコのイメージと人との関係
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Murata M., Shimano C., Yoshida N., Koda N. & Deguchi Y.
2. 発表標題 Factors affecting dog behaviors during animal-assisted activities
3. 学会等名 The 79th Annual Meeting of the Japanese Society for Animal Psychology
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshida N. & Koda N.
2. 発表標題 Effects of personality of goats (<i>Capra hircus</i>) on their behaviors in problem solving situations
3. 学会等名 The 79th Annual Meeting of the Japanese Society for Animal Psychology
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 甲田菜穂子
2. 発表標題 イヌ・ネコの口腔ケアに対する飼育者の意識と行動
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥谷日菜子・甲田菜穂子
2. 発表標題 絵本に描かれるイヌ・ネコのイメージ
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 甲田菜穂子
2. 発表標題 高齢犬を介護する飼育者の負担感と対処方法
3. 学会等名 日本社会福祉学会第66回秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田直矢・甲田菜穂子
2. 発表標題 問題解決場面におけるポニーから人への関わりかけに関する実験
3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会第24回学術大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 太田 仁、阿部 晋吾(監修)(分担: 甲田菜穂子)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 支えあいからつながる心	

1. 著者名 Beetz A., Hart L.A., Jegatheesan B.I. & Koda N.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Frontiers Media SA	5. 総ページ数 90
3. 書名 Children and Companion Animals: Psychosocial, Medical and Neurobiological Implications	

〔産業財産権〕

〔その他〕

講演
甲田菜穂子 2022年8月20日. 人とイヌの関わりと動物絵本 からだと発達研究会.
甲田菜穂子 2018年6月9日. 動物とのふれあいを通して生命尊重の心情を育てる 武蔵村山市立第一小学校.
甲田菜穂子 2017年10月1日. 身体障害者補助犬との共生 VeCoReP第4回研究会.
研究会発表など
島谷日菜子・甲田菜穂子 2019. 絵本に描かれるイヌとネコのイメージと人との関係 東京農工大学農学サイエンスフェスタ2019.
村田美和・島野知ひろ・吉田直矢・甲田菜穂子・出口善隆 2019. 動物介在活動中のイヌの行動に影響を与える要因 東京農工大学農学サイエンスフェスタ2019.
吉田直矢・甲田菜穂子 2018. 課題に直面した時、ポニーはどのように人に助けを求めるのか? ウマと人の関わりを科学する 東京農工大学2018年度キャリアイベント.
吉田直矢・甲田菜穂子 2018. 課題に直面した時、ポニーはどのように人に助けを求めるのか? ウマと人の関わりを科学する 東京農工大学農学サイエンスフェスタ2018.
野村良梨子・甲田菜穂子 2017. 獣医療関係者と飼い主のコミュニケーションの円滑化のためのリーフレットの可能性 VeCoReP第4回研究会.
報道関連情報
甲田菜穂子 BSフジ ガリレオX 第267回「わたしたちの動物観」 2022/5/22 再放送2022/5/29.
甲田菜穂子 たまら・び悠(多摩情報メディア)「心を癒し人をつなぐ動物の力」2021年 9: 2-5.
甲田菜穂子 BS-TBS 「ねこ自慢」 2021/5/5 再放送2021/5/30、2022/5/25.
甲田菜穂子 ダックススタイル(辰巳出版)「ダックスの笑顔を考える」2019年 31: 64-69.

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------